

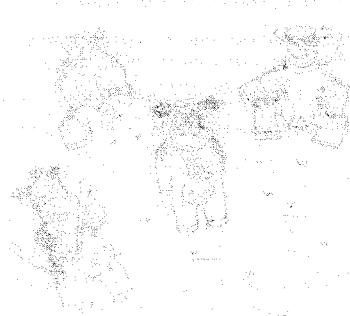
XIII. 続・悲牛院花子の生涯

～花子最期の日々～

花子の最期は、悲劇的なものであった。病に倒れた花子は、長い闘病生活を送り、ついに命を失った。その最期の日々は、苦しみと涙の連続であった。花子の死は、周囲の人々に大きな衝撃を与えた。彼女の生涯は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。

花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。

花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。花子の死は、多くの人々に教訓を与えた。



続・悲牛院花子の生涯

花子最期の日々

はじめに

本編は宮農改善資料第二十集に掲載された『育成牛残酷物語・悲牛院花子の生涯』の続編です。

前作では花子の誕生から初産分娩までの様々なエピソードを描き、育成技術の現状に対して問題を提起しました。

そして初産分娩から一年後、花子は低能力という事で廃用にされ、短い生涯を閉じます。

本編では、前作で触れなかった搾乳牛としての最後の一年間について描かれており、搾乳牛、初産牛、乾乳牛の飼養技術について問題を提起しています。

前作同様、架空の物語ですが、各々のエピソードについては実際にあった事実を基にしています。

それでは、花子の世界へようこそ。乳牛の飼養管理について、一緒に考えてみましょう。

あたし、花子。今じゃ人間やってるけど、元々は牛だったの。育成牛の頃から色々な目にあっただけど、娘を生んで、お乳を出すようになってからも、あんまりいい思い出は少ないわね。

あの頃の御主人は、熊五郎さんというんだけど、良い人なんだけど、あんまり勉強するタイプの人じゃなくて、あたし達にすればちょっと災難って感じ。育成の頃の話は前にした事あったわよね。娘を生んでから？そうね、いきなり色々あったわよ。例えばね…。

晩秋・出産後

食欲はあまり無かった。三日前に出産したばかりで、そのショックから立ち直っていないせいもあったが、数週間前からなんとなく体調が悪く、食欲が落ちていた。彼女は決して大きな牛ではなかったが、小太りぎみであったため、妊娠末期の軽いケトージスを起こしていた。

とりあえず配合飼料だけは全部食っていたが、それだけで何となく腹一杯になり、その後もうサイレージはあまり食う気にならなかった。空腹でいきなり配合を食うために、軽いルーメンアシードスも起こしていたのである。

お産の前って、太り過ぎてても痩せ過ぎてても駄目みたいね。仲間のお姉さん達を見ても、お産前に太っていると、三ヶ月位で逆にガリガリに痩せちゃって、発情もなかなか来なくなるみたい。といって痩せ過ぎだと、立ち直りは早いけどあんまりお乳は出ないみたいだし、やっぱりすっ

きりした健康美人が一番ね。それと、おなかが減った時、いきなり配合を食べると、少ししか食べなくても、すぐにおなか一杯になったような感じがするのね。先にサイレージとか食べてからだと結構食べられるんだけど。でも御主人はいつも配合からくれるの。

最初の数日はスタンションに繋がれたままだったが、その後は昼間は放牧地に出されるようになった。

朝の搾乳が終わると、スタンションを外された。他の牛はそろそろと外へ出て行ったが、彼女はどうすれば良いのかわからず、牛床に茫然として立っていた。その内、主人に「早く出れ」と怒られたので慌てて皆の後を追った。

放牧地に出ると、他の牛達が入れ替わり立ち替わりに攻撃してきた。育成の頃から群が変わる度に経験してきた順位付け行動ではあったが、群の頭数が今までになく多かった。



群が変わる度にいじめられるのはわかってたけど、育成の頃はひどいいじめは最初の二、三日だけだったが、この時は四、五日位続いたの。頭数が多いもんだから、一回だけじゃ覚えきれないのよね。

あたし達の社会って、上下関係が厳しくてね、何十頭いても、ゼーんぶ順番がつくの。必ずしも年の順で訳じゃなくて、強いか、弱いか、実力勝負なんだけど、あたし達みたいな初産の小さな牛じゃ、はなっからケンカになんないのよね。たまに鼻っ柱の強い若い子が入ってきて、先輩のお姉さん達に逆らったりすると、そりゃあひどい目に会えるよ。

そんなにいじめられるんだったら、そばに寄らなきゃいいって思うかも知ないけど、群のそばから離れるのって、とっても不安なのよ。悲しい性ね。

秋も遅いこの時期、放牧地には草があまりなかった。いくらからでも良い草が残っている辺りには強い牛達が陣取っていたので、花子は僅かばかりの食い残しを捜し捜し食べた。

夕方になると、牛舎への帰り口に牛達が集まってきた。先頭周辺にはやはりリーダークラスの牛が陣取った。やがて主人の妻がきてゲートを開き、牛舎へと群を追った。

先に牛舎に入ってきた牛達の何頭かは、入口近くの他の牛の席へ入り、飼槽の配合飼料を横取りして歩いた。花子の席は割と入口近くにあり、群の最後の方で入ってくるので、相当な量を横取りされていた。

お腹ぺこぺこで牛舎に戻ってくると、ベッドの前に配合が置いてあるんで、夢中になって食べると、御主人が配合を継ぎ足してくれるの。周りのお姉さん達にはやってないみたいだからひいきされてるみたいでちょっと嬉しかったけど、後から考えてみたら、あたしが戻ってくる前に周りのお姉さん達にあたしの分を食べられちゃってただけなのね。

あたしの両隣りは、二頭ともあたしよりずっと強いお姉さん達なんだけど、自分達の分はさつさと食べちゃって、あたしがフウフウ言いながら食べている間にも、あたしの分をどんどん横取りしちゃうの。怖くて文句も言えないんだけど、どのみちあたしにしても、すぐに食欲が無くなっちゃうもんだから、あきらめはついたわ。

夜の間はずっと牛舎にいて、サイレーシを貰ってるんだけど、お姉さん達は夜中までには食べちゃって、やっぱりあたしの分まで手（口？）を出して食べるのね。朝までには私の前のサイ

レーシも無くなっちゃうもんだから、御主人はあたしもちゃんと食べてると思ってるみたいだけど、ほんとはほんのちよっとしか食べてないのよね。

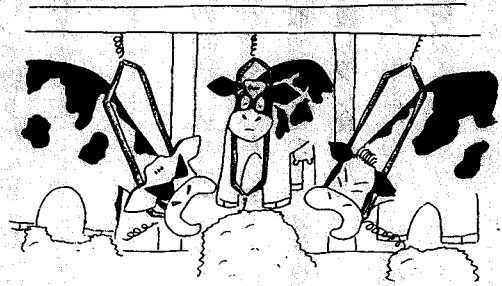
冬

分娩してひと月もすると、放牧地の水場に氷が張るようになってきた。この頃までに主人は放牧を止め、牛舎に牛を繋ぎっぱなしにした。

元々換気の良い牛舎ではなかったが、主人は窓を閉めっぱなしにした。ある時、普及員が訪ねて来た折、「せめて昼間だけでも窓を開けてはどうか。」と言ったが、窓の立付けが悪く、毎日開け閉めするのが大変なので相変わらず閉めっぱなしのままであった。

牛床はコンクリートの上にゴムマットが一枚敷いてあるのみで、舎内が常に湿っぽいため、マットも濡れている事が多かった。古い牛舎なので、今どきの乳牛にとっては牛床の長さも幅も足りなかったが、花子は体が小さかったので寝起きにはそう苦勞はしなかった。しかし、両隣りの牛にとってははかなり窮屈らしく、寝起きの度に足を滑らせてバタバタしていた。おかげで花子はしょっちゅう両隣りの牛から肢や乳房を蹴られたり踏まれたりした。

相変わらず花子は今一つ食欲が無く、両隣りの



牛にエサを横取りされ続けていた。乳量は大して出なかったが、それ以上にエサを食っていないため、どんどん痩せていき、来る筈の発情もろくに来なかった。実際には不規則ながら発情は来ていたのだが、あまりにも弱いため、主人も、花子自身も気が付かなかった。

一日中同じとこに繋がれてる事自体はそうつらい事でもないのよ。さすがに春先になって変な具合に蹄が伸びちゃったのには困ったけどね。外に出ない限り、お姉さん達にいじめられたりする事も無いし飼料だつてちゃんとあたるし(そりゃあちよつとは横取りされるけど)。

水だつて好きな時に飲めるもの。運動不足でストレスたまるだろつて？大して気になんないけどね。のんびりしてる方があたしは好きだな。放牧地に出たつて、お姉さん達に追いかけて回されたり、草を捜して仕方なく歩いてるだけで、別に好きで歩き回つてる訳じゃないもん。

それより、牛床そのものの居心地が悪い方がつらいわよ。ベッドは固くて濡れてるし、牛舎の空気はよどんで暑いしね。冬に暑いつていうのも変かしら？でもほんとに暑いのは。食事のあとなんか汗かく位なんだから。一度、普及員さんが来てあたしの顔の前の窓を開けてくれた時は、ちょっとの間は寒いかと思つたけど、すぐ慣れちゃつたし、久し振りにおいしい空気をたっぷり吸つたお陰で珍しく食欲が湧いて一杯食べられたの。だけど夕方になって御主人が窓を閉めたら、それっきり春まで開けて貰えなかった。天気の良い昼間だけでも窓を開けてくれるとよかつたのに。

春

「窓、外しちまつたらどうです。」普及員が言った。「もう水道はシバれませんよ。」

「うん、そう思つてな、一ヶ所やつてみたんだが。」と主人「レールが腐つててよ。外そうとしたらレールがバラバラになつた。」

「いい機会じゃないですか。とりあえず全部の

窓のレールひつpegがして、秋までに窓を開け閉めし易いように直しちまえばいい。壊すだけなら手伝いますよ。」

「直すのはやつてくれないのかい。」

「そういうのは業者に頼むなり、自分で暇を見てジシタカやるなりしてよ。俺、手先が不器用だから、壊す位ならできるけど、物を作るのは苦手ですてね。」

普及員が窓枠に手をかけ、手前に引くと、いつも簡単にレールがバラバラになつて取れた。

「あ、ほんとうにバラバラになる。こいつあ面白いや。」と次々に窓を外しにかつた。人の物だと思つて、気楽なものである。主人も「しょうがねえな。」と苦笑しながら窓を外して回つた。

花子は分娩前後のダメージから立ち直りつつかつた。加えて、日が長くなつてきた事、窓が外されて舎内の空気がぐんと良くなつた事もあり、食欲もどんどん回復してきた。

しかし、暖かくなるにつれて、困つた事が起きてきた。サイレージの二次発酵が進み始め、くん炭化してきたのだ。

主人の当初の予定では、粗飼料は放牧が始まるまで十分に間に合う筈であつたが、くん炭化したサイレージを捨ててしまうと、どうも足りないよつであつた。

そこで、毎日のサイレージの給与量を若干減ら

す事にしたが、不足分を他で補おうとまでは考えなかった。「ちよつと足らないけど、牛に辛抱して貰うべや。もう少ししてパドックに出せるようになったらロールを食わせてやれるし。」

せっかく食欲出てきたと思ったら、サイレーシ減らされちゃうんだもん。貰ったサイレーシも、何か変な匂いがして、あんまりおいしくはなかったけど、それにしても少なかつたわね。他のお姉さん達もみんな、何となく体調崩したみたいね。

ルーサン乾草とまで贅沢は言わないけど、せめてルーサンペレットとか、ヘイキューブとか、そんなに高くない物だってあるんだから、もう少しなんとかしてほしかったな。

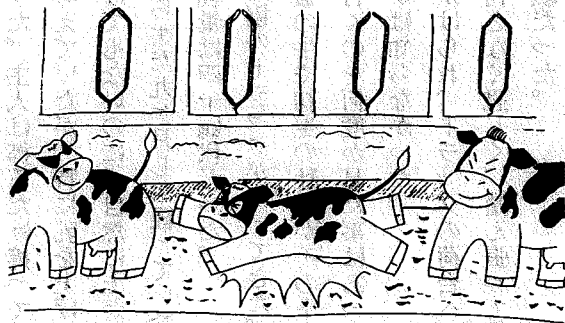
やがて土壌の凍結が抜け、パドック（ここのパドックは地面が土だった）に入れるようになると、昼間はパドックに出されるようになった。

パドックの中央には草架が二つあり、それぞれロールサイレーシが一個ずつ置かれていたが、草架の側には強い牛が陣取っており、花子はなかなか近づく事が出来なかった。

夕方になり、草架の側の牛達が離れると、花子や他の弱い牛達は慌てて草架の草を食った。草架の草があらかた無くなるのに三日程かか

たが、牛達が食ったのとはほぼ同じ量は地面に落ちていた。主人は三日毎に新しいロールを草架に置いていたが、古いロールの残りをそのままに、上に重ねていた。

ある日の朝、花子は牛舎からパドックに出る際に、牛舎内の通路で足を滑らせ、仔牛の頃に痛めた後肢の古傷を再び痛めてしまった。



分娩から半年が過ぎていたが、花子は未だ妊娠していなかった。最近、二度目の授精はされていたが、主人は「肢も痛めてるし、これで留まんなかったらあきらめよう。」と考えた。

あのパドックの草架ってね、お姉さん達に三〜四頭でも居座られたら、あたし達下っ端は全々近寄れないのね。で、お姉さん達は草架から草を引っ張りだしては寝心地のいいベッドを作って座って、あたし達は指をくわえて（そりゃ指は無いけどね）お姉さん達がどけてくれるのを待ってるだけ。もうお腹べこべこ。夕方になってお姉さん達が牛舎に入ってくと、それと草架に行って慌てて草を食べるんだけど、その間にお姉さん達はあたし達の配合を食べてるってわけ。

でね、何日かすると草が痛んで変な匂いがしてくるんだけど、お腹が減ってるもんだからあんまり気にはしなかった。でも、お姉さん達はあんまり食べなくなったわね。

この頃よね、通路で滑ってころんだの。あたし、仔牛の頃にカーフハッチごと風で飛ばされた事があるって、その時に後肢を痛めたんだけど、これでまたひどくなったの。この後、ずっと足を引き摺るようになってしまった。

夏

放牧が始まった初めの頃は、昼間だけの放牧で、夜は牛舎でサイレーシを与えられていたが、昼間においしい青草をたっぷり食っていたので、どの牛もあまりうまくないサイレーシはそれ程食べな

くなってきた。サイレイシも最後の方になると、品質は極端に低下していた。

やがて一番草の収穫が始まると、昼夜とも放牧されるようになった。

朝夕とも、搾乳のため牛舎に入ると飼槽に配合が置かれていた。配合の給与はこれだけで、搾乳が終わった牛から順次スタンションを外され、放牧地へ戻っていった。

配合を食いながら水を飲むため、ウォーターカップには配合のカスが溜っていたが、主人は草刈りで忙しく、清掃されぬままにウォーターカップの水は腐っていった。

夜も放牧に出るようになったら、飼槽の配合の量がいきなり倍になったの。それまでは搾乳が終わってからも一回配合を貰ったのが、二回分まとめて貰うようになったのね。

あたしはお乳も大して出ないもんだから、二回分たつて大した量じゃなくて、どうってこととはなかったけど、一杯お乳を出してるお姉さん達はふうふう言いながら食べてたわね。搾乳が終わって放牧地に出ても、しばらくは草を食べる気にならないらしくて、ぼーっとしてたみたい。

あと、ウォーターカップが臭くなってきたのにはまいったわね。御主人も忙しいのはわかる

けどね、たまには掃除してほしかったな。あんまり長い間ほうって置くくと、こすつても汚れが取れなくなるみたいよ。

一番草の収穫が終わる頃、花子はほとんど乳を出さなくなった。主人は搾るだけ搾ってから廃用に出そうと考えていたが、特に乳を上げる様な操作をしたわけでもないのに、自然に上がってしまつた。分娩からまだ九ヶ月しか経っていなかった。乳検の乳期乳量は四千kg代だつた。

ある日、農協のトラックがやつてきた。花子は、以前に大先輩の牛や初生の牡牛がそのトラックに乗せられて行くのを何度か見た事はあつたが、どこへ行くのかは知らなかつた。

もくしをかけられ、トラックの荷台へ引いていかれたが、何となく恐しく、踏ん張って抵抗を試みたが、無駄だつた。

トラックの荷台で揺られながら、幌の隙間から外の景色が見えた。放牧地に仲間の牛達が草を食む姿が見えた。育成の群れの中には花子の娘の姿もあつた。

花子が仲間達の所へ戻る事は二度となかつた。

天国から娘や仲間達の幸せそうな姿を見守つてみると、どこからか大きな、優しい声が聞えてきたの。

「花子や、未だ熊五郎の事を恨んでいるかね。」
「ううん、だって御主人だって悪気があつたわけじゃないし、それに今では娘達だってあんなに待遇が良くなつてるもの。恨みなんてこれっぽっちも無いわ。」

「そうかい、お前は心根の優しい子だね。ところで、人間に生れ変わつてもう一度下界に戻つてみる気は無いかね。」

「うーん、下界も結構面白そうだけど……。今のままでもあたしは十分幸せだし……。」

「下界に戻つて他の牛達の幸せのために働くってのはどうかね。」

「うん、そういう事なら、あたし、戻ります。」
てなわけだね、人間になつたの。牛だつた頃の癖が抜けるまで、今んとこあそここの角のお寺で行儀見習いで御奉公してるんだけどね。そう、悲牛院さん。あたしね、勉強して学校行って、普及員になろうかって思つてんのよ。それからね……」

(完)